伊勢の伊流の話を聞いて置きたい、
先年伊勢風土記を著作された岡田一郎
先生の説を重復する事になる事も有る
残念だら伊勢の地元に伊勢の郷土史を書
た書籍らしい物が皆無である口、我が後楯村
門田史史先生、楯村史誌を出されて居る和
會祖父、祖父が古い詩を得へを能く知って居て私
の者心づいた頃から幾度となく聞かされた事から
を今迄の記述や所有の伝説伊勢公司先生
の書とも照合して認確めても見た
伊勢は昔宮じろ千軒、瀬戸千軒、中寺千軒
と云はれ三千軒の大きな住所で有ったと言ふ
今の島、柳子島と共に一つの島であった今も古い人
は今の島、柳子島をふくめて宮じろと呼んで居
り我後伊勢が離島陶発促進法に依る
第四種遷港に指定され大成建設が作業
所を今の島に造成した所、古銭が相当数出土
したが恥ずかしい話しだが私達も生活に追われる毎
日であり調査した事実も聞いていない、私が
子供の頃祖母から聞いた子守歌を思い出す
ねんねこねこ、火が見えるお月が出るホーラ
か祭のばんに行って見れば、庭で餅つき、おもてで

お宮さんドンドコショ」長じてから此の唄を唯人から聞いた事が無いが今考へて見れば奇怪には秘話
福な人が住んで居たのでせうと思はれる
中寺と現在の「水城」と言はれる所から「ミズノハナ」
と云はれた海岸地域で繰り返し記にみられ
焼失したと云う。美しい松原があり神社も寺
もここに有ったと言ふ其の時、鳥羽長尾連の相
渓の決戦当時神社も松林寺も現在地に造
営したらしくその時も言い伝へて居る事に沿の
掃部がある昔所神社の御魂はその昔、夏の
夜掃部して居た鯖の焚込網に大漁があった其
の時網の中から丸い石が現はれよくまあ網が破
れなかったものだ早く捨てしまえとほうこ
んでしまった幾ばくして場所のちがふ漁場で又
大漁が有った其の時も又その夜の石が入って居た
そこで此が大漁の神様だと持ち帰って祭り
社を造って祭って居た所が火災に合った其の時
おどろいたのは大きな石で土中にめりこんで居たそこで
「ソコイリ」大明神を云はれていたと云ふ
此の中寺地区の水城（ミシロ）から巴の紋の発掘
いま家良時代の土器が出土している
平安の昔宝也上人が肥渡浜（ソウド）に上陸
されて那珂郡五条塔婆（ソトバ）ヶ岳で修行され
赤センダンの木で十一面観世音像を作られ安置

された現在瀬戸の松林寺に秘仏として安置された
島民信仰の心である記三島が地続であったと
思はれるのは宗也上人離島の場所として残っ
ている「願願（ガンガン）」云ふ釣人の間で能く知られた岩（ハエ）がある
此の岩から舟に乗り帰途につかれたと云ふ其の時
上人は野道山の方向を拝して「願願域就」と言
はれたと云ふ伊島では今も「願願（センガン）」と呼ん
でゐる松林寺では昭和第五年十一月廿九日宗也上
人の一千年祭を行った本年一千口三百人迄と思は
れる何れにしても地元に確実な書残しが皆無の為中
世までの事は判然としない

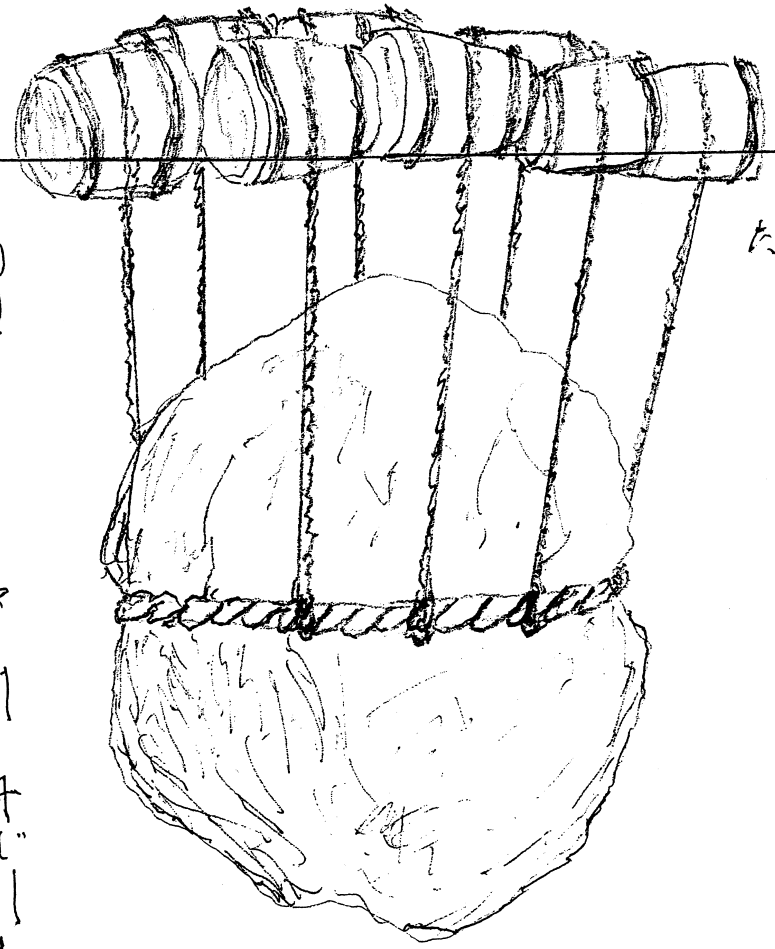
中世に小笠原氏外の将が居を構へて居たと云はれる口説
でもはっきりした事迄は蜂須賀水軍で活躍した事実
で有ると口碑伝承してある伊島の住民の祖先も松林寺
の過去帳で最古の人物は神野怒右衛門である筆者
が小学生の時校長として十四年以上伊島に居住家族
共に退職まで教員があった羽浦町岸後一先生が調
査研究され大家と呼ばれて居る神野家は当時十六代
と発表され伊島の史跡をガリバンにして高等学校の我々
生徒にくださったが我等時代に入り我々も出征と復員
した時には何も無くなっていた十七代を継ぐはずの我
我の先輩、樂（ラクシ）君が長崎県で死亡姉妹は皆他
家に縁組した為現在家系はどうなって居るかわからない
同姓であるが大屋（オオヤ）中屋（ナカヤ）三軒屋（サンゲンヤ）と云
はれる三系統がある大屋は延宝、元禄、宝永等
あり、日本家系協会によれば神野家の始祖は清和帝の
皇孫経基王を祖とする清和源氏山縣氏流神野次郎頼忠
の系と御衣祝有貞を祖とする諏訪神野族から出た神野源二行成

（筆者の祖父として指導していた事あり）
後継者寿之君も潜水事故で死亡

系、又桓武帝から発した桓武平氏大掾為幹の裔神野
鎌五郎が発祥した名族との事で参三家の豪族が異る
伊島港から大屋の屋敷に通じる道路を「殿様みち」と呼ん
でいる蜂須賀家が磯遊び磯釣りをこうれた時は赤井甚五
兵衛が家臣の水軍を使れ大鯛に乗内しお休憩の後現在
小浜の御成港（オナリバエ）で伊島海士の貝掘りを見物を
したと云う国防上重要拠点である事は今昔を通して変り
なく見張所や狼煙（ノロシ）場があり（ノロシ山と呼ばれている
現在伊島燈台がある其の昔上佐の長宗我部元親が
野望を満す為の海上拠点とする目的の為の大屋神野家へ
自分の妹の娘を縁付かせたが縁の薄しさに自害したと云う
がほとんど史的に知られていない、神野家の他伊勢家は伊
勢（三重県）から天明、安政。松友家。岡本。川西。橋農。
「藤代家」は海路からと聞いている何れにしても伊島の住民の暮らしは
漁撈だけ拠り所れない、孤島の為漁獲物は魚が、米と言う常
者に頼らなければならない生物で出荷する事が困難だった事と
想はれる　我々子供の頃鯉船があり殆んど鯉は「カツオブシ」
にしていた㊂と言う屋号煎屋（ウオヤ）と言う薬師像伝
説する神野万二郎じいさんが製造していた。何ようも
食量が大変であった事野がサなく自給する事がある事なる為
山を開いて段々畑を作り、サツマイモ、大麦、豆類、野菜を
作っていた　今も伝はる　金唄（ボニウタ）に次の移歌がある
「金が来たらこそえ　夕に半、マーゼてあれにサギが
ちら」　とヨンガ　ヨホホ
此の様に金、正月に出来た贅沢だったのであろう伊島の
海士が活躍出来る名を上げたのは我が時代である
蜂須賀家が阿波藩主となり水軍を重視し本村甚
五兵衛、森甚大夫に命じ水軍体制を強化した事船方
である「森甚五兵衛さん海の殿よ海の正歩く路を持つ」と

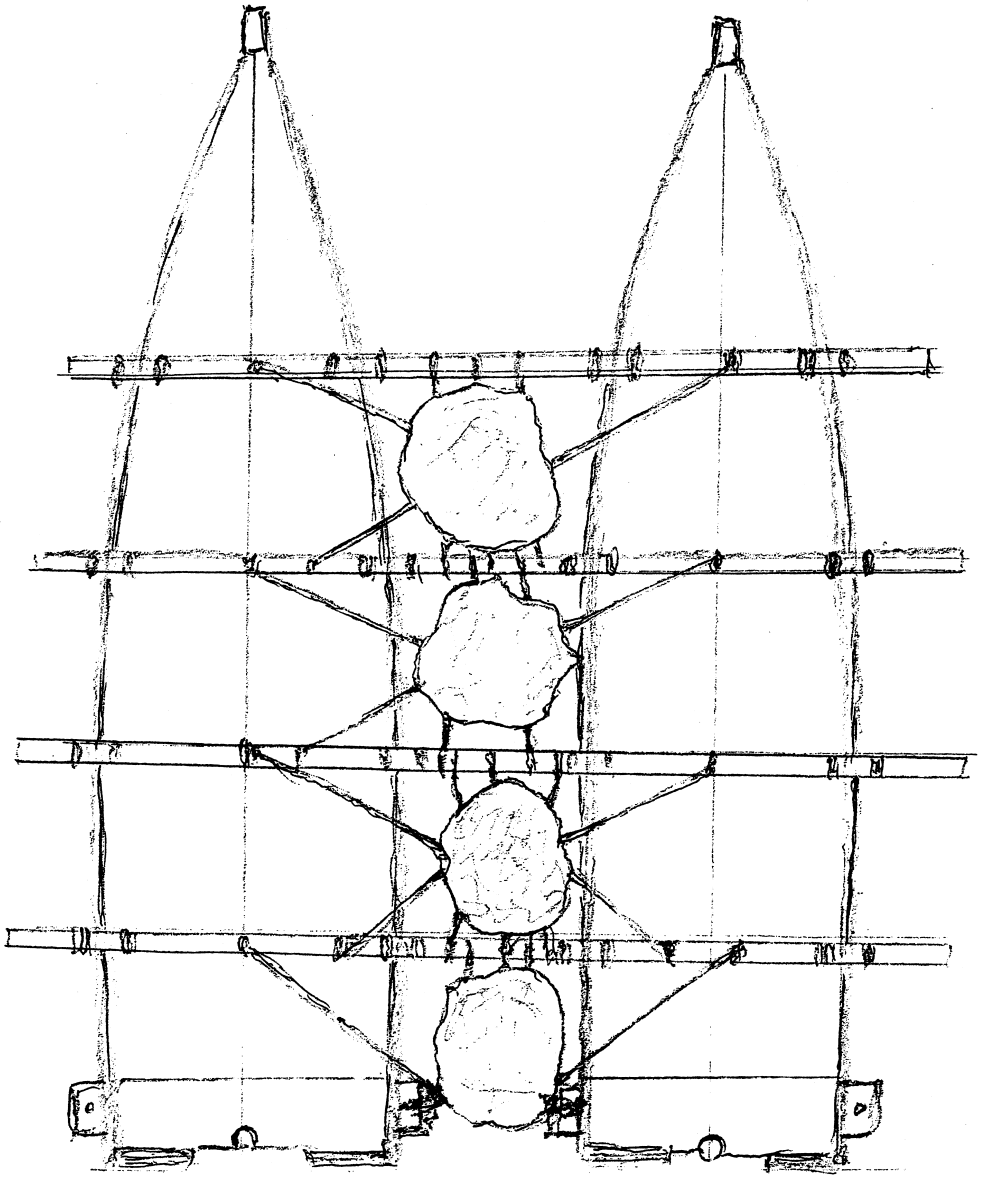
又「海に強る吹」「森甚五兵衛」と云う油の殿よ阿波の徳島城
船舟頭」と云われるが其の訓練は「水練」と称船術で
あった特に水練は伊勢の海士が童子をになった
童仕備のまく水中から操作出来る泳法を修得した
為古式泳法と云われる水練を童仕たのであろう
立泳（タチオヨギ）観海流等発達政五年（一七九三）森家
に対し藩士皆泳を命じられた伊勢に於ける泳法は漁
を目的とした泳法で育つたと想れるが未格的な古式泳法
は天明年間の屋号で残っている伊勢者平氏の
祖先が伊勢の国（三重県）から伊勢水軍の一人として戦
の友藩藤堂家から蜂須賀藩に移り伊勢の海士泳
法を伝授したのではないか伊勢松林寺に古い墓石が沢山有
つたが当主が大阪移住の為整理してしまった既往に
伊勢家の一族は数戸在住している　筆者の父も
伊勢家から婚姻良子に来た一人である　藤堂藩の関係あ
つたと言う九鬼水軍も伊勢の海士同様平時は漁業
に従事していた様に聞いている　蜂須賀、山内、藤堂
三藩は四国に深い関係を持つ藩であり藤堂家は
伊予の国に今治城を築いた五万石の小大名であったが
その配三藩は豊臣秀吉亡き後徳川家にくみしそれ
ぞれ蜂須賀は阿波藩、山内は土佐藩、藤堂は伊勢
を含む三国の大名三十三万石を承けた其に海士の主
業（本業）として海防に備へなければ当然であろう次上の様な
考察から水練の交換もあったと思はれる其の決果は
朝鮮征伐に於て森水軍は海上輸送や上陸作戦等
抜群の功をたてた後、大阪築城が始まり「奇吉」は各地
の大名に対し必要な石材特に城壁用の大石を献上す
る様命じた家政「吉之」そして森水軍に採石輸送を命
じた

そこで素甚五兵衛は一番大きな大石を選び込み石を夢げようと思ひ樽泊の湾口に今に残るおたふく岩」を船「イカダ」空樽を使って乗せようとしたが岩がびくともしなかず失敗し責任者であった娘婿赤沢蔵人は追放された。そこで伊豆の海岸陸上の岩より海中にある岩を空樽を使用し浮力を利用して浮上させる事を思ひ立ち左図の様な方法で輸送に成功したと云ふ。



大潮の最大干潮時に海底が潜り三本綱や麻の綱で四斗樽と云はれた大樽を多数取り付け二米近く干満の差を利用した。

満潮時浮上した岩を引き舟で引き樽泊湾内に運び波静かな所迄次の干潮を待って樽綱をメこも此の作業をくり返して徐い岸辺に置くこうして外海の岩石を集た。

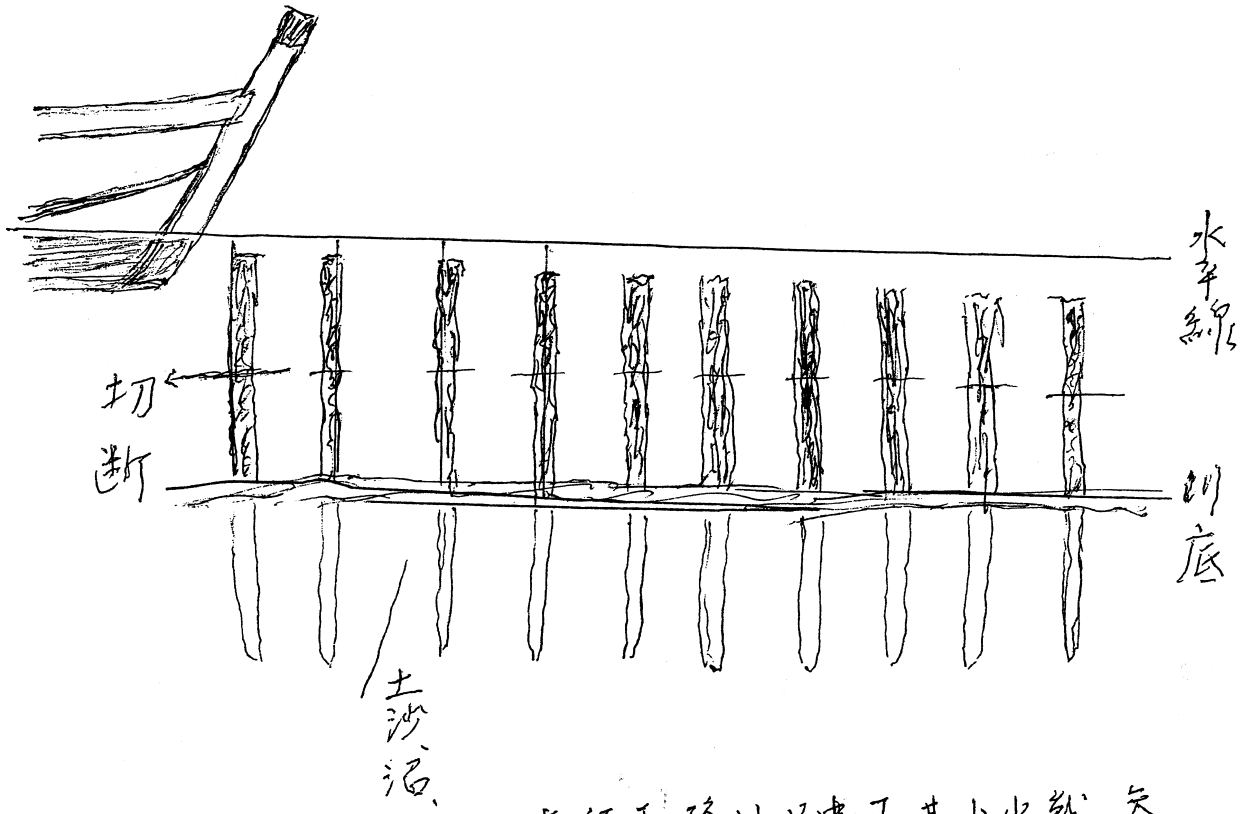


拘て此の岩石を大阪まで輸送する方法は次の様に考へたと云ふこの様に二隻以上の舟を強固な木材で組合せる事を「モツソ」を組むと言ひ終戦後も港湾工事や沈下物の引揚等に利用した

此の「モツソ」舟を先舟が引き風のある時は風の舟が帆を張り風の無い日は八丁櫓で漕いだ。こうして大阪淀川に入って行って築城現場に一番近い所く輸送したと伝へ聞いている

此の方法により海部郡由岐の港口に有った蛙石と言ふ大石を石井町高原橋向の蜂須賀公遊園地に移し恩賞を受けたと云はれて居る

其の後大阪冬夏両陣に海上輸送に従事し功績を挙げ特に夏の陣に従軍し淀川阻止作戦の際大阪方は軍師真田幸村の計により西国大名の軍船の淀川利用を阻止する為川の各所に左の様に生杭の杭を無数に打ちこみ軍船の通航を不可能にしたが素水軍は伊勢の海士により潜水して此杭を自船の通行可能な限度に縮と使で切り取り一番乗り込みに成功したと云はれている困みに松の生木は重量が有り浮力が少ない為水中に打ちこみ易いし土砂に入った部分は腐敗しない性質を持っている



参考

戦後、川の護岸工事に当り古い石積堤をコンクリートに改良した時石積の基礎に松杭を使用している物がほとんどあった中丸に造成したものが当時のまま腐敗していないのつた

終戦後港湾護岸工事に杭機を利用した経験がある、楷泊、大湯、等

徳島藩主は幾多の功績に対し伊島の海士に対し次の様なお墨付を与えたと云ふ「灘目一円御構なし」此実績が認められ廃藩置県後も永く旧慣行として昭和廿年新漁業法により海区漁業調整委員会が発足して現在の状態になった以上の如く実績を挙げた伊島の海士も廃藩置県後は主客を失い貧しい島の住人の一人になり目標をなくしたと云う述べた通り孤島の生活は困窮の極となり此の時、搗村史誌に表されている軍四郎蔵翁が潜水器漁業を想い立ち長崎県に出張し機具の有る事を知り同志を集め資金を募り機具一式を購入器具の度数で練習し伊島の浅瀬の浅海から潜水を初め蛇の採捕に成功中略（風土記、搗村史に記載あり伊島書所神社に顕彰碑あり）朝鮮に出漁されにより夏期は伊島で又モグリ漁を営み冬期六ヶ月を朝鮮へと此の方法が戦前まで続いていたその内瀬戸内海にタイラギ（貝柱）瀬戸貝の生息して居る事を知り近くは鳴門海峡（小鳴門）等遠くは有明海、伊豆津島（福岡県）オキの島（日本海）まで出漁伊島の潜水夫の名を全国的にしたが戦後金属、石炭の不足者となるにより阪神内港、姫路、北九州市横浜等へ居を移し港内にある沈下物、金属、石炭等（昔の之等の積降しは人力やウインチモッコによるものだった為相当数の落下物があった）此れ等の引揚の為組合を組織し許可を承けて之に従事する者が続出した瀬戸内海沿岸にも地元潜水士が出現し昭和四十年頃から戦後復興の為の土木工事が激増港湾、搗りよう河川護岸等、水中基礎の仕事に活路を求め会社を組織する者又個人で営業する等全国に散在し活躍する事となったがその決死伊島の人口は八百を数えていたものが現在（平成十九年）二百名にまで落ちこんでしまい、戦前、戦後二百名もいた伝統を誇った海士の数も二十名にまで減げん最近出現したウエットスーツ

（慣行）

の着用、アクアラングを使用する他地区からの密漁者による無法操業（禁止期間九月三十日～一月三十一日九センチ殻長）を問題視、雑貝をも密漁する。海洋汚染による海草の激減、磯やけ等共の二つの選択安易ではなく現在蛇の人口流出による雑貝の激減を実施している最近四五名の帰還就業者があったと聞いている

附記

昭和三十四年九月当時小学校長井村忠雄先生であった伊勢湾台風の時野球の練習試合の為先生不在の日曜日午後十三名とともに、出かけて帰途南西の風が強くなり波が高く海は荒れて来て棚子島の島かげにたどりつく手前の釣のメッカ和歌浦の先端で大きな横波を受け当時の限天丸七トンの小型連絡船は横倒しになったかと思われたそこである上甲板にいた生徒達は校長先生、青年、生徒十三名全員が海中に投げ出され、てしまった船長室に居た船員は気絶がず百米以上も走った中、客室に入って居た乗客が前部に返転した時は人の頭が小さいボールの様に波の中で黒く浮かんでいた校長先生は助かる事は皆無と思ひ大変な事になったと思って居たと言ふにもかかわらず此の大波の中衣類を脱ぎ捨て全員が助け揚げられた他の地区では考えられない事だと話している

是れ和歌浦民皆泳の阿波森小学の遺産であろう

以上の如く此の業を永く支え来た背骨には伊豆海士組と云う組織であろう島民の海士就業者は全て此の組員となり統会により選ばれた役員が組の運営にあたる

運営費は金の休業日を利用し早朝基金をすべて出漁し収入を之に当てた学校、神社、寺、等の寄附、奉納、社会奉仕等にも支出した。新漁業法が制定されて既の採捕期間が二月一日から九月三十日迄と定められて居たがウニツトスーツの無い時代は大体、旧三月雛節句が終って若者が出漁する。大半は朝鮮出漁者が来ていた為五月頃全員がそろう状態であった為漁場を東西に区分し各年毎に一区を交互に開禁する（口開）後は五月口開三寸（九センチ）以下の稚貝は絶対獲ってはならない是れは女子供にまで徹底していた今も島内では常識となっている

其の昔は宗螺（サザエ）や海胆（ウニ）等高級神饌には使われず収入にならなかった昭和初期阿部市橋町に内村定結工場が出来内は定結に数は衣類のボタンにして利用度が増し海士組の手で荷造りし毎日橋港に附（着）郵便船で送っていた

新らしい漁場造る為ニロロト内外の投石を毎年漁業組合で負担して県の関係に申請し地元負担金を徴収して実施していた教育方面も市一次産業の進興に協力され春中学、伊豆中学に水産実習船を備へられ伊豆校では童心的に潜水漁法を習得させ内は漁獲物を販売し其の収入を修学旅行や勉学の費用に当てていた昭和一の水産国と云われた日本の昔日の姿である本県に於ても漁業専従者の減少から農漁村は後継者が無く水産高校も又実習船阿波丸も廃止される現状である

昭和二十七年漁業調製委員会が発足三十年頃たったから県下の漁場は三海区に区分され伊豆の漁業権は橋漁協阿部漁協との共有漁業権となった上、橋港の一部が南部海岸に区分された為がねて野球を持って居た海部部の漁協が接離漁場への入漁を申請し南部調製委員会で協議を

を重ねて関係漁協への公聴会も実施されたが決論に到らず日和佐漁協で最後の採決を行う事に決し、事の重大さを憂いた伊島の海士組と中心に漁協島民の男子は二手に日和町に集結し要望会に反対の意志を示そうと言ふ島民の集議一決当日は全島休業、大型漁船、特に漁協が経営していた連絡船も休業、日和佐漁港に度々入港した経験のある筆者に操船を依頼され当日早く伊島を出港し会議の成り行きを見守る事となり海部部下で反対に廻った伊産利漁協の理合員と一緒に集合していた。

ところが海部の連中が伊島の中学をあたはずの若者に暴力を振るっていると言う事が上り救援に向った同組合員が大乱闘となり負傷者が出る始末警察が出動し多数逮捕され翌日の会議は流会となり伊島漁協役員は警察に逮捕者の釈放を申請したが許されず代表者が残し我々は夜半伊島に引揚げた翌日役員会を開き逮捕の者への差入れを毎日続ける最後の決計は漁協で引受ける等決議した。

こうして漁場と漁業権を守ったのである逮捕者の中に四名が筆者の船の乗現同業者で後輩であった現在知る人も少しとんど島内には居ない、我々の後輩で操業していた頃日蛇を一日十五キロ二十キロも獲っていた累蝶も五十キロ六十キロも獲っていた、ウニなどガゼと足や手に尾さるような物として取る人はいなかった　ウニ一ツトスーツの出現から乱獲による資源の枯渇が最大の原因であろう　今や蛇累蝶ナマコ、ウニ、皆貴重品になった

我々食料が足の時代には蛇の生物、一貫目（三七五匁）とジャガイモ、又はカボチャ等と同じ一貫目で交換してもらう為農家の庭先まで持って行き頼みこんだ事を思ひ出し世の変動の凄ひさを忘れる事は出来ない、地球の温暖化による海況の変化三宝鯛では鮑が激減した云ふ神話から三千年ミズホの国スナドリの国は世界一の食料輸出入国になってしまった自国で食料を確保供給出来ない国が世界の先進国と云へるのだろうか

日本中の人々が将来を見すえて考える時が来ているのではないかしらつくづく思ふ

○附記　先日森水産の話をして居た時森氏の菩提寺橋泊福蔵寺に小笠原と云ふ無縁墓孫作の墓があること、住職山本正厳師の言を得た。伊島城主であろう調査の決計向達であった

水軍の名残として毎年男子節句、五月五日に殿様、
踊から東組（東部落）西組に分かれて男壮年、乃潜ぎ
競走があった。オシゴクと云い戦争前迄実施して
いたが過疎の為船、人員が不足今日忘れ去られよう
としている。筆者も戦争三ヶ年連続選手二回主将を
長として十自衛隊実施した
消え去る事は残念である。今一つ島の名物、波無、
島ではスコテンと云い大人も子供も土用波がおきる
夏のみに奇記スバナ（水流地点）に高波がおきた此
の波に乗て浜辺まで高速で走るのである其の事で
あるから、スノーボード等無いから漁船の板子の内自分
の体格に合った大きさの物を持って海に乃板子上に
立つのでなく腹部に当てて波乗りをして楽しんだ
スバナの距離が長かったので波に乗れた時はうれしかった
今は港になってしまって不可能になった
現在あればサーフィンのメッカになったかもしれない

次上発表した事は島の古老から代々伝へられた口説
俗謡や戦争戦後見聞した事柄を元に指村詩（史）
田部市市長先生阿南の俗謡、伊勢国土記岡田一郎先生
等と照合せ曾祖父母、祖父、父と三代に渡る人々から小学
生の頃から聞かされた伝説を思ひおこし記述してみた
多く間違ってあるやも知れぬが伊島の歴史を知る一助
になれば幸である

曾祖父　松友嘉七　昭和六年　七十四才で死去
曾祖母　松友キタ　昭和九年　七十三才で死去